て、二格が文にあらわれていれば用いやすい。

(59) 先生が もとの厳しさに かえる。

(60) 先生が もとの厳しさに もどる。

「もどる」は「もとの状態になる」という意味を、語自体に含んでいると考えられるので、(54)や(56)も言えるのだろう。

3. まとめ

以上、「かえる」と「もどる」についてまとめてみる。

「かえる」

○本拠地的な場所に移動する。

〈人・物〉ガ 〈場所〉ニ かえる。

○本来の状態に変化する。

〈人・物〉ガ 〈状態〉ニ かえる。

○本来の所有者に保持権が移動する。

〈物〉ガ 〈人〉ニ かえる。

○相手の行為をうけ、それに応える。

〈事柄・行為〉ガ かえる。

○反転して表裏などがかわる。

〈物〉ガ かえる。

「もどる」

○以前存在していた地点に到着する。

〈人・物〉ガ 〈場所〉ニ もどる。

(到着することに重点がある。二格は本拠地的な場所でもよい)

○以前あった状態に変化する。

〈人・物〉ガ 〈状態〉ニ もどる。

○逆方向に移動する。

〈人・物〉ガ 〈距離・程度〉(タケ)

〈方向〉ニ もどる。

言語経歴：1961年7月東京都台東区生 現在
に至る。

あらそう・きそう・たたかう

石井直子

1. はじめに

ここでとりあげる三語には共通して「敵より何らかの点で優位に立とうとする」という意味がある。特に「あらそう」と「きそう」はほとんど同義と扱われる場合さえある。しかし、次の例のように、言いかえのできないこともある。

(1) 太郎と次郎が 首席を あらそう。

(2) *太郎と次郎が 首席を きそう。

(3) *太郎と次郎が 首席を たたかう。

本稿ではまず「あらそう」の分析を行い、それと比較しながら「きそう」「たたかう」について検討しようと思う。

(5) 太郎が 次郎と あらそう。

(6) 兄弟が あらそう。

問題となるのは、(i)と(ii)の構文の違いが意味に与える影響である。従来、この二者の違いは発話者の視点の違いによるものであって、表現される客観的事実は同一であるとされてきた。しかし、(i)ではA・Bともに動作の主体であり、(ii)ではAのみが動作の主体でBは相手である。したがって、主体の特徴についての記述は、(i)ではAにもBにもあてはまるが、(ii)ではそうとは限らない。主体の特徴と相手の特徴に差がみとめられる場合、構文の違いも意味記述の際考慮にいれなければならない。

2. 構文

三語とも基本的に次の構文をもつ。

(i) AトBガ (Cヲ) V

(ii) Aガ Bト (Cヲ) V

(iii) Dガ (Cヲ) V

(ただし、Dは「兄弟」「三人の男」など複数である名詞句)

具体的な例文で示せば次のようになる。

(4) 太郎と次郎が あらそう。

3. 分析

3.1. あらそう

「あらそう」には、[AトBガあらそう]や[AガBトあらそう]のようにヲ格をとらない場合と、[AトBガCヲあらそう]、[AガBトCヲあらそう]のようにヲ格をとる場合がある。

3.1.1. 主体と相手

(1) 太郎と次郎が 首席を あらそう。

- (7) 親と子が あらそう。
- (8) 社会党と共産党が あらそう。
- (9) 早稲田が 慶応と 優勝を あらそう。
- (10) ソ連が アメリカと あらそう。
- (11) 正義感と臆病な心が 心中で あらそう。
- (12) *万年筆とボールペンが あらそう。

主体は意志を持つものであって、あらそおうとする意志を持っている。ただし、必ずしも有生である必要はなく、(8)(9)(10)のように、党・学校・国家などのグループがくる場合もある。(11)は「正義感」と「臆病な心」を擬人化したものと考えてよいだろう。

さて、主体と相手は交換できる場合がある。

- (13) イギリスが フランスと あらそう。
- (14) フランスが イギリスと あらそう。
- (15) 原住民が 移民と あらそう。
- (16) 移民が 原住民と あらそう。
- (17) 秀吉が 柴田勝家と 天下を あらそう。
- (18) 柴田勝家が 秀吉と 天下を あらそう。

以上の例から、相手も主体と同様あらそう意志を持ち、主体と相手の力はほぼ互角であると考えられる。これを検証してみたい。

- (5) 太郎が 次郎と あらそう。
- (18) ?太郎が いやがる次郎と あらそう。
- (19) *太郎が 眠っている太郎と あらそう。

(5)(18)(19)では、相手の意志が減少するにつれて文が不自然になるのがわかる。相手も主体と同じくあらそう意志を持っているものであるといってもよいだろう。

では、主体と相手の力関係はどうか。

- (22) 高校生が 小学生と あらそう。
- (23) 高校生が 大学生と あらそう。
- (24) 番頭が 丁稚と あらそう。
- (25) 番頭が 旦那と あらそう。

(22)~(25)の例の主体と相手には普通は力の差があると考えられる。しかしながら、上の文ではそれが感じられない。すなわち、(22)の「高校生」は小学生と同レベル、(23)の「高校生」は大学生と同レベルとみなされるのである。「あらそう」は主体と相手の力の差をみとめない。主体も相手のレベルの力を持つものとみなす。[AトBガあらそう]という構文では、A・Bとも主体であって相手がないため、両者に力の差がみとめられないのは同様だが、それがどちらのレベルの力であるかは示しえない。

- (26) 高校生と小学生が あらそう。

3.1.2. ヲ格にたつ名詞

ヲ格をとる「あらそう」で、そのヲ格にたつ名詞はどのようなものか。

- (27) 兄と弟が 親の遺産を あらそう。
- (28) 三人の男が 一人の女を あらそう。
- (29) ロッテが 日本ハムと 優勝を あらそう。
- (30) 労働党が 保守党と 政権を あらそう。
- (31) 太洋と中日が 最下位を あらそう。
- (32) 勝敗を あらそう。
- (33) 当落を あらそう。

「あらそう」のヲ格には、「遺産」「女」「優勝」「政権」「首席」「天下」など、それを手に入れることによって敵より優位にたつことのできるものがたつ。ここで優位にたつというのは、何らかの点でまさる、ぬきんでるといったような意味で、(31)のように、いわばマイナスの方向にぬきんでる場合も含むとする。このようなヲ格名詞を「目的のもの」とよぶことにする。また、(32)(33)のように、プラスマイナス両方の「目的のもの」を並べていう表現もあるが、その例はあまり多くはない。

3.1.3. ヲ格の有無による違い

- (4) 太郎と次郎が あらそう。
- (1) 太郎と次郎が 首席を あらそう。
- (34) ソ連と中国が あらそう。
- (35) ソ連と中国が 国境の川の領有権を あらそう。
- (7) 親と子が あらそう。
- (36) 親と子が チャンネル権を あらそう。

ヲ格がある場合、「あらそう」で示される対立は主に目的のものに関することである。重点は目的のものを得ようとすることであり、敵との関係、敵より優位にたとうとすることはむしろ副次的に表明されている。つまり、たとえば(1)では「太郎」と「次郎」がそれぞれに首席を得ようとしていることをいっているのであり、二人が必ずしも敵対しているとは限らないだろう。極端な場合、互いの存在を知らないこともありえるのではないか。これに対し、ヲ格のない場合は、一般的に互いが敵より優位にたとうとして緊張状態にあること、または、実際に攻撃しあうことを表しているといえよう。

3.1.4. 慣用表現

- (37) 彼の成績は 県下でも 一二を あらそう。
- (38) 手術は 一刻を あらそう。
- (39) 先を あらそって 走りよる。

(40) 血筋は あらそえない。

(41) 派手に着飾っても 年齢は あらそえない。

(37)(38)は敵が明示されていないが、(37)には「他の人の成績」、(38)には「病気などの進行」を補うことができる。(39)も含めて、これらは今までの考察からはずれるものではない。ところが、(40)(41)はうまく説明することができない。この「あらそえない」は「否定できない・隠せない」といった意味であるが、これを肯定形の「あらそえる」としても「否定できる・隠せる」の意味にはならない。よって、分析のできない慣用句としてよかろうと思う。

3.2. きそう

(42) *太郎と次郎が きそう。

(43) *日立が ソニーと きそう。

「きそう」ではヲ格がないと不自然な文になる。

(44) *兄と弟が 親の遺産を きそう。

(45) *三人の男が 一人の女を きそう。

(46) ロッテが 日本ハムと 優勝を きそう。

「きそう」のヲ格にたつ名詞は、「あらそう」のヲ格にたつような「目的のもの」ではない。

(47) 太郎と次郎が 成績を きそう。

(48) 日立が ソニーと 技術を きそう。

(49) 高島屋と三越が 売上げを きそう。

(50) アメリカが ソ連と 軍事力を きそう。

(51) 一流レストランが 味を きそう。

(52) カラオケ大会で のどを きそう。

(51)(52)は慣用表現で、各々「味のよさ」、「歌のうまさ」と解釈することができる。これを含めて(47)~(52)のヲ格にたつ名詞は、主体や相手が既にそれについて一定以上のレベルを保っている分野である。(48)の例でいえば、「日立」も「ソニー」も既にかなり高度な技術を持っていて、そのレベルを更にどの程度上まわるかによって敵より優位にたとうとするということなのである。このことから、主体と相手の力の差は小さいと考えられる。また、限定された狭い分野における動作であるから、(22)~(25)の「あらそう」の例のように主体を相手と同レベルとみなすこともできない。したがって、次の例のような主体と相手の力の差が大きい文はおかしなものとなる。

(53) *豚と海豚が 泳ぎを きそう。

以上に述べたことは、「きそう」と「あらそう」が言い替えられる場合のニュアンスの違いを検討すると、よりはっきりする。

(54) 人気を あらそう。

(55) 人気を きそう。

(56) 権力を あらそう。

(57) 権力を きそう。

(58) 殿の寵愛を あらそう。

(59) 殿の寵愛を きそう。

(54)(56)(58)の「あらそう」の場合、人気や権力や寵愛を得ようとすることであり、これに負けた者はそのような「目的のもの」を全く持たない。これに対し、(55)(57)(59)の「きそう」の例では、既に一定の人気や権力や寵愛を持っている者同志がさらに敵にまさろうとするのであって、たとえ負けてもともとと持っていたものまで失うわけではない。

この特徴のためか、「きそう」の主体や相手のきそおうとする意志はやや弱いような印象をうける。次の例のように主体や相手に無意志のものがくる用法も、これと関連があるのかもしれない。

(60) 住友ビルと三井ビルが 高さを きそう。

(61) 仁徳天皇陵は エジプトのピラミッドと 大きさを きそう。

また、きそいあうことによって、主体や相手のヲ格名詞の分野における力が增加することがある。森田1977には、「きそう」は「あらそう」に対し、きそいあうことのよさをみとめたプラス評価の語であると述べられているが、たぶんこの傾向による説なのではないか^(注3)と思う。

3.3. たたかう

「たたかう」は「あらそう」のヲ格をとらないものとの言い替えができる。

(4) 太郎と次郎が あらそう。

(62) 太郎と次郎が たたかう。

(63) 二派にわかれて あらそう。

(64) 二派にわかれて たたかう。

(65) 武蔵が 小次郎と あらそう。

(66) 武蔵が 小次郎と たたかう。

これらの例をみると、「たたかう」の主体や相手は「あらそう」の場合と同じく意志を持ったものであるといえよう。また、「たたかう」は「あらそう」に比べ、もっぱら主体が敵より優位にたつためにおこす積極的、具体的働きかけに重点があるように思われる。これを確かめるため、次のように働きかけの手段を明示した文を考えるといいだろう。そうすると、「たたかう」しか使えなくなる。

(67) *武蔵と小次郎が 真剣で あらそう。

(68) 武蔵と小次郎が 真剣で たたかう。

(69) *原始人は 石斧で 獣と あらそった。

(70) 原始人は 石斧で 獣と たたかった。

さて、「たたかう」には相手に意志を持たないもの
がくる用法がある。

(71) 寒さと たたかう。

(72) 貧困と たたかう。

(73) 癌と たたかう。

また、敵が明確に示されない用法もある。

(74) 総選挙を たたかう。

(75) 自民党の候補者と 総選挙を たたかう。

(76) フランスは イギリスと 第二次世界大戦を
たたかった。

(77) フランスは ドイツと 第二次世界大戦を た
たかった。

(75)(76)(77)の「と」は「～といっしょに」の意味になっ
て、相手を表しているとは解し難い。したがって、(77)
は文法的には正しいが、歴史的事実と反するため、不
自然な印象を受ける。一般に「たたかう」がヲ格をとっ
た場合、ヲ格にはたたかひの意味を多少とも含んだ語
句がち、ト格は相手ではなく共同者を示すようであ
る。

(71)~(77)のような用法があるのは、「たたかう」が主体
の行動を表す語だからであろう。これは、「あらそう」
や「きそう」が敵の存在を重視し、主体と敵を同じウエ
イトでみているのと対照的である。

(78) 相手が何者かもわからぬまま たたかった。

(79) *相手が何者かもわからぬまま あらそった。

(80) *相手が何者かもわからぬまま 力を きそった。

4. まとめ

○あらそう

・ヲ格がない場合：

互いに敵より優位にたとうとして緊張状態にある
こと。または、そのために実際に攻撃しあうこと。

・ヲ格がある場合：

ヲ格にたつものを得ることによって、敵より優位
にたとうとすること。

※主体と相手はあらそう意志を持つ。

※主体と相手の力は同等で、常識では力の差があると
考えられる場合は、主体を相手と同レベルとみなす。

○きそう

ヲ格にたつ名詞句の分野で一定以上の力を持つ者
同士が、それを上まわる程度で敵よりも優位にた
とうとすること。

○たたかう。

主体が敵より優位にたとうとして、積極的・具体
的な行動をおこすこと。

〈注1〉 『三省堂国語辞典第三版』では、

あらそう——①相手に勝とうとする。競争する。

②相手より先に、ものを手に入れようとする。

③けんかする。

きそう——あらそう。負けまいとしてはりあう。

たたかう——(戦う)④敵と打ちあって争う。

⑤戦争をする。⑥勝ち負けを争う。⑦試合・競
技をする。(闘う)相手とせりあって勝とうと
する。

となっている。

〈注2〉 本稿では(ii)の構文のト格を特に相手とよぶ。

(i)でも、AにとってはBが、BにとってはAが、各
各相手であるともいえるが、これらは(ii)のト格とあ
わせて敵とよぶことにする。

〈注3〉 ただし、この森田氏の説には賛成しかねる。

ヲ格にその分野で力のあるものがプラス評価される
ものがくれば、確かに、きそいあって力を増すのは
よいことである。しかし、たとえば(50)の「軍事力」
のようにマイナスイメージを持つものがヲ格にたつ
場合もあり、そのときは「きそう」をプラス評価の
語ということとはできないだろう。そういう意味での
評価には、ここでとりあげた三語とも中立である
と思う。

言語経歴：1961年1月神奈川県横浜市生 1
歳～神奈川県茅ヶ崎市

かわかす・ほす

河野裕子

1. はじめに

「かわかす」「ほす」は両者とも「対象の水分を取り

除く、つまり乾燥させる」という共通の意味をもつ。
しかし、